

東八里奇の
歴史

はじめに

昨年 10 月町内会の役員会で、八王寺音頭作成の議が決せられ(の話がきまり)、その準備として(その準備に)作詞の資料として、八王寺の歴史の調査をお引き受けしてもう 1 年が近づきます。

素人ながら何とか判るであろうと軽い気持ちでお引き受けしたものの、いざ調査してみるとこれは大変で、資料や記録に(が)乏しく、また昔の事を知る人も少なく本当に困ってしまいました。

幸いに地元の先住の方や、関係の皆様にご協力を頂き、何とか取りまとめる事が出来ました。

ご協力を頂きました皆様には厚く御礼申し上げます。

先にも(先に)申しましたように、乏しい資料をもとにとりまとめたので、正確を欠く点が多々あると思いますが、不悪可ず(悪しからず)ご諒承ください。

この調書が八王寺音頭作成(の作成)に或いは八王寺の歴史が話題に上った時、少しでもお役にたてば、これに過ぎる喜びはございません。

昭和 61 年 8 月(8 月 20 日)

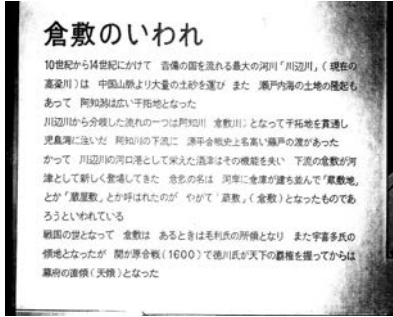
池田 作之進

目次

はじめに	
沿革	
旧所属領分の沿革	
部落名称の起源	
八王寺	
萬寿莊	
都宇郡萬寿莊	
大市(大内)	
日吉	
漬	
地域の変遷	
支配者沿革	
徳川時代	
明治維新後	
幕末管轄表	
幕末管轄別村名一覧表	
自治活動	
教育	
神社、遺跡その他	
三社神社	
素盞鳴神社	
無葬場	
半鐘	
旧高梁川堤防	
交通	
玉島方面	
橋梁	
蚊水橋	
渡船場	
大内渡	
水島の空襲	
岡山の戦災	
東八王寺町歴代町内会長	
附録年表	

沿革

この辺りは、往古海中にあり今の福島・浅原・軽部(現清音村)の山々を廻りて四方海であり、倉敷・福島・帯江は海中の一小島に過ぎず、八王寺・日吉・渋江・安江等は勿論海中にあった。



備中誌によれば、往古は山の麓、或いは広谷・水別れ谷・祐安の山の辺りに少しの田畑ありて、漁人の住家もありに追々新墾田が出来ていた。今より403年程前、天正11年福島・大島・平田、天正13年日吉庄が開発せられ、元和4年(約368年前)八王寺が開発せらる。天正11年宇喜多秀家の臣岡豊前守検地して臣千原九右衛門勝則に命じて完成したものである。

千原家々記によれば、千原藤右衛門勝重、当時西阿知に浪々しその頃一男九右衛門勝則若年に宇喜多秀家に随従し天正10年当国松山城城主清水宗治落城の節勝則宇喜多にありて出陣し秀吉公と毛利家和睦の後酒津川(現高粱川)の下50余町の堤を築くことを勝則に命じこれが完成を見たものである。新開記録付紙によると、四十瀬通り大川堤、塩除土手を築き浦田へ堰き付けける。五軒屋の北通り天正年中までは内海なり。元和元年より同4年までに草野となる。50余町の堤とは旧東高粱川東側の堤の事で現在の福田用水に添った西側の地でクラ東塚やサンエーストア東側の墓地は当時の堤の跡である。

この堤の完成により、倉敷新田・笹沖・福井・四十瀬・伯楽市・沖・渋江・八王寺・水江・加須山が開発せられた。



旧東高粱川左岸堤跡(現酒津遊水地東岸)

開発前、五軒屋の北通りは天正年中までは内海で船渡海の地であった。外海風波の時、西国大名衆も内海を通路し商船も廻っていたと云う。

当時酒津川(現高粱川)二俣に流れ、一筋は水江川、又一つは東へ流れ濱村を経て倉敷に至る。この辺り芦原にて白楽市など少し田畑となり、渋江辺りもすべて芦原なりと云う。

酒津川は永年に亘り中国山地より大量の土砂を運び出し、又瀬戸内海の隆起もあって当時すでに浅海になっていたと思われる。

高粱川は、この堤の完成により三ツ子淵(小田川と高粱川の合流点付近)より東と西に分かれ、東は(東高粱川と云う)黒田村、酒津村、水江村、八王寺村から四十瀬村を通り、児島郡浦田村より海に入り、西は(西高粱川と云う)浅口郡柳井原、窪屋郡水江村、浅口郡西原村を通り、浅口郡連島から海に入っていた。

村落の形成はすべて山麓から次第に平地へ発達したと云われる。

旧所属領分の沿革

旧萬寿村は、宇喜多氏の開発であるが、関ヶ原戦役後宇喜多氏は領地を没収せられて小早川氏の領となり、その後播州姫路城主池田氏の領地となった。

大内、日吉、八王寺の一部(現東八王寺の内金貸地区を除く)、川入の一部は、摂津国島下郡二階堂(現大阪府)の溝咋城主旗本7万石長谷川氏の領地となり、明治維新まで日吉村に勤番所を置いていた。

又、現在の東八王寺の金貸地区と福島、大島、平田、川入の一部は、備前池田家の領地にして明治維新の際、岡山藩と改称せられ、明治3年岡山藩を分割して生坂藩を置かれその配下に属した。

部落名称の起源(隣村のもの一部併記)

八王寺

ひ備中誌によれば、大高村笹沖の寺谷と云う処に井上寺(現倉敷市阿知町 地藏院)と云う天台宗の寺ありしが、天正13年笹沖より渋江村に遷りし時、鎮守山王を今の地(日吉 石堂地)に移せり。此の並村に山王七社の内、八王子権現を祭れるにより村の名とせるならずや、とあり。現在の三社神社が是である。

又、八王寺と云ふは、当時このお宮は神仏混合社で寺の権力が強い時代であったので、八王子を八王寺としたのであると云はれている。

又、東八王寺と云ふは、俗称にして、中洲学区内に旧万寿の八王寺と旧中洲の八王寺の二つ町があり、昔から万寿の八王寺地区を本八王寺或いは先八王寺と呼んでいたが、昭和33年頃当時の八王寺公民支館長の山脇弘氏が、地区名をハッキリさせる意味で万寿の八王寺は東にあるので東八王寺と命名した。現在では、公共機関その他各種団体共東八王寺の地名が定着している。



日吉 山王大権現(現春日神社)

萬寿荘

養和元年院応下文に、新熊野社領28ヶ所の内にて之を万寿3ヶ荘と云う。今窪屋郡子位荘、浅原、生坂、西坂、三田の5ヶ村を万寿荘と呼ぶ。

以上は、荘園誌に記す所であるが、備中誌に曰く、

都宇郡萬寿荘

今上荘、下荘或いは中荘など云へり、万寿年中墾田せし故かくは名付く。中荘東鳥羽(天正11年正倉院文書に撫河郷鳥羽里と見ゆ)と云う処に萬寿山報恩寺と云う寺あるも、其所以有也。又それより少し西の別府村にモズガハナと呼ばれる所あり、萬寿和訓はマス也。マとは常に通音なれば古へ万寿が鼻と云いたるを何時となく唱へ安らかなるにより萬寿をマスと又モズと混じて唱へたるべし。

大市(大内)

今大内と云う村あり、秀雄、日吉、津津、倉敷辺りにかけて海面の時、漁獵の得物をこの地にて売買せるより魚市と云いを何時となく大市となりしなるべし。

日吉

山王権現を産土神とするより、京都は日吉にならひて日吉とせしにあらざるか。

濱

往昔は海辺にてその後この辺地方となりし頃、濱辺となりしより、濱と云いしなり。濱村庄屋に松山城主池田備中守殿より水上貨の事を書したる状残り。

地域の変遷

東八王寺は、元和4年(約368年前)宇喜多秀家の開発にして、当時の先人が度重なる洪水と戦いながら代々受け継いで耕作し美田を作り上げた村である。

往古より周辺の地域では、兵乱や事変に見舞われているが、幸いこの地区はその様なこともなく平和な農村であった。

明治維新後は、濱村と小子位庄村、大島村、福島村、八王寺村(金貸地区)と川入村、大内村と八王寺村(金貸地区を除いた地)と日吉村の5部に名主或いは庄屋1名或いは2名が置かれていた。維新後、小田県を置かれてより窪屋郡を第15大区と称し、福島、大島を小10区に、平田村を小11区に、濱村と小子位庄村を小12区に、川入村、日吉村、八王寺村を小13区と称したが、明治22年町村制が施行後は、これ等の各村を合して萬寿村となった(八王寺村の内金貸地区はこの時萬寿村に編入された)。

その後、昭和2年4月1日、萬寿、大高の2村が倉敷町に合併し、良く3年4月1日市制が施行され戸数6381戸、人口30,481人の倉敷市となった。

支配者沿革

徳川時代、末葉に於ける支配者、庄屋、名主、年寄、総代、判頭等で分明なるもの。

1.川入村、八王寺村の一部(金貸地区) 備前領

名主 已前不詳

秋岡 弥次郎	享保年中より
秋岡 嘉一郎	宝暦年中より
秋岡 惣五郎	天明年中より
秋岡 嘉一郎	寛政年中より
秋岡 惣五郎	文政年中より
秋岡 綱介(素平)	慶応年中より

2.日吉村、大内村、八王寺村(金貸地区を除いた地区) 旗本領(摂津溝咋家)

名主 已前不詳

井上 長右衛門	元和4年より
岡 七右衛門	明暦2年より
岡 安右衛門	貞享4年より
岡 半右衛門	正徳5年より
治右衛門	正徳7年より
長山 半平	享保19年より
森山 弥十郎	明和元年より
長山 藤蔵	明和2年より
善右衛門	明和7年より
鳥越 是助	安永6年より
鳥越 集蔵	享保3年より
鳥越 藤四郎	文化元年より
白神 安之助	文化2年より
杉原 重兵衛	文化3年より
右蔵	文政8年より
杉原 久吉	文政10年より
鳥越 武右衛門	文政12年より
白神 孫三郎	文政12年より
鳥越 右源治	天保2年より
横山 嘉兵衛	天保3年より
横山 民三郎	嘉永7年より

3.大庄屋(16箇村組合)

秋岡 嘉一郎	天明年中より
秋岡 惣五郎	寛政年中より
秋葉 五一兵衛	嘉永2年より安政7年まで
秋岡 惣五郎	慶応年中より

明治維新後

1. 大内、日吉、八王寺(戸長及び副戸長)

児島 徳平治	横山 半平	鳥越 楠次
--------	-------	-------

横山 富太郎
高尾 仙作

秋岡 素平
横山 富太郎

三宅 染治
秋岡 素平

町村制施行後の万寿村々長

江口 竹太郎
有安 唯五郎
古屋野 橋衛(大正 11 年) 以下略

古屋野 惣七郎
秋岡 素平

横山 富太郎 中略
横山 富太郎

幕末管轄表(関係分のみ抜粋)

備前藩

岡山本藩 池田章政
生坂支藩 池田政禮

倉敷支配所

備中代官 櫻井 久之助

溝咋領

摂津島下郡二階堂 旗本 7 萬石 長谷川為五郎

幕末管轄別村名一覧表(関係分のみ抜粋)

備前藩	四十瀬	大高村
	渋江	〃
	田之上	〃
	平田	萬寿
	大島	〃
	福島	〃
	大内の一部	〃
	川入	〃
	子位庄	〃
	水江	〃

溝咋領	大内の一部	萬寿
	八王寺	〃
	日吉	〃

鴨方藩	四十瀬新田	大高
	福井	〃

	白楽市新田	〃
	笹沖	〃
	吉岡	〃

倉敷支配所	倉敷	倉敷
	新田	〃
	安江	大高
	沖	〃
	濱	萬寿
	酒津	中洲

各町村大字別丘陵一覧表(関係分のみ)

富久	川入	備前
	大内の一部	備前
		溝咋
	八王寺	備前
		溝咋
	日吉	溝咋

自治活動

萬寿村に合併以前から東八王寺は富久と称し、川入、大内、日吉の他隣村八王寺、安江、酒津との交流が深く合併当初の東八王寺の戸数は推定 20 数戸と云われる。

地区内では仏教の信仰と併せて地区民の親睦を図る目的でお大師講を作り、この場を通じて情報の交換や諸行事の協議連絡を行ってきた。昭和 3 年 5 月倉敷絹織(株)(現倉敷レーヨン)が現在地で操業を始めて以来、農業専一であったこの地区も戸数が徐々に増加してきた。

昭和 17 年頃(大東亜戦初期)、市の指導により町内会が組織され、その隣組組織を通じて防空訓練や市からの連絡、生活物資の配給等が行われていた。昭和 20 年 8 月終戦と共に社会情勢は一変し、暫く活動していたが次第に低調になりやがて解消した。

昭和 32 年 8 月、町内中組の山脇弘氏が、町内先住者と協力して、中洲公民館八王寺支館(現東八王寺町内会)を組織され、推されて山脇氏が支館長に就任、同氏の指導と役員諸氏の協力により環境衛生思想の向揚に努めた。特にカ、八工の撲滅のため地区民が一体となって、便所や下水溝の改善が行われ、その努力が認められて、34 年 4 月倉敷市長、倉敷保健所長より、また 35 年 5 月には岡山県知事よりそれぞれ表彰される等、地区民の自治意識が次第に向揚していった。

昭和 37 年 12 月、当町東地区に勤労者住宅団地が造成され 35 戸が入居、それまで 50 戸であった町内は一挙に 80 数戸に増加した。当時集会所が町内北組の墓地の内にあったが建物が老朽化したため、町内居住者の寄付に



より、昭和 43 年 2 月現在地に新設した。

この頃から都市化の波が急速に進展し、47 年 4 月東八王寺公民支館は東八王寺町内会と改称され、規約を作り歴代会長を中心に協力して町内会の運営が行われてきた。

現在戸数 300 戸、人口 1100 名の町内に発展している。更に、現在計画されている三田五軒屋線が開通すれば一段と発展が予想されている。

教育

記録によれば東八王寺地区には明治 23 年 4 月富久の日吉小学校が万寿尋常小学校に合併し、それ以来万寿学区に編入されていたが、昭和 19 年 1 月中洲町が倉敷市に合併して、同年 4 月学区が改称せられて中洲学区に編入し現在に至っている。

東八王寺地区は、日吉小学校に通学したと思われるが、この学校については位置、規模とも詳らかでない。

神社、遺跡、その他

三社宮(現三社神社)

本社は八王寺村間にあり、備中誌によれば、八王寺が開発せられた当初から、地区の守り神として、祭祀せられたお宮で、当初八王子権現と称していたが後年三社権現と改称、更に三社宮と改称せられた(詳細「部落名称の起源」の八王寺の頁参照)。

又別の記録によれば、文久年間摂津国溝咋城主旗本 7 萬石長谷川氏の支配たりしが、天保年間に焼失せりと云われる。その後再建せられ明治 4 年に三社宮と改称す。

更に、昭和 19 年三社神社と改称し指定村社に列格せられ現在に至っている。

・敷地面積 319 坪(三田五軒屋線の道路敷地を含む)

・祭神(天照大神の御子八柱命)

天之忍穗耳命 (アメノシホノミコト)

天津日子根命 (アマツヒコネノミコト)

活津日子根命 (イクツヒコネノミコト)

熊野久須毘命 (クマノクスビノミコト)

天穗日命 (アメノホヒノミコト)

多紀理比賣命 (タキリヒメノミコト)

市寸嶋比賣命 (イチキキヒメノミコト)

多岐都比賣命 (タキツヒメノミコト)



八王寺権現(現三社神社)



素蓋鳴神社(飛地境内社)

素蓋鳴神社(スサノオ、三社宮の飛地境内社)

この社は八王寺金貸にあり、祇園様と云って庶民に親しまれている社で、祭神は 素蓋鳴尊にして境内官有第 1 種に列せられている。

記録によれば、天保年間の創建にして、当時この地が備前領なるが故に領主池田家の許下を得て、領内八王寺村の内支配地に(金貸)創設せらる。

大祭は、旧 6 月 13 日で三社宮の親神として祭祀せられしと云う。

このお祭りは、八王寺の祇園祭と称せられ、倉敷の三大夏祭(本町の粟島様、新川の黒住協会の夏祭(輪くぐり)、八王寺の祇園祭)の 1 つに数えられ、昭和 12、3 年頃までは近隣の村人は勿論の事、倉敷の町からも大勢のお参りがあり、又芸者や遊女がタクシーや人力車で或いは家人に付き添われて、参道は人で埋まり、夜店も沢山出て、賑やかな祭りであった。

無葬場

東八王寺北組の北端にあり、昔八王寺村開発当時の先住の人やその後の人の遺体を埋葬した処で、石塔は北組墓地に建てて吊っている。



無葬場



警報用半鐘

半鐘

この鐘は文化2年(約180年前)に作られたものらしく「西阿知村 眞海、文化2歳」の銘がある。当時の八王寺村の住人が度々起きていた洪水や火災の警報用に使っていたもので、現在の北組お地藏様の横に約7米の木柱を立て、これに吊るしていた。昭和37年木柱が老朽化したので3本柱の鉄柱に改築し、47年頃まで使用していたが、昭和59年6月交通安全対策として近くにあった電柱の移設に伴い、この鉄塔が電線の障害となった。この頃すでに倉敷市の消防体制は整備されており、この半鐘は無用となっていたので、この機に撤去している。鐘は、資料として東八王寺公民館に保存している。

旧高梁川堤防

約386年前の元和4年八王寺、水江、渋江、安江、伯楽市、四十瀬、倉敷新田等が開発せられた旧高梁川東側堤(現福田用水西側地)は、天正11年宇喜多秀家の臣岡豊前守がその臣千原九右衛門に命じて作ったもので酒津より五軒屋まで延長50余町(約6km)と云われている。その堤の一部は各所にあるが、当時の姿に近い形で残っているのは、現在の酒津遊水池東側堤がそれで、北端の竹藪になっている付近は当時の面影を留めている。

(注)

高梁川は、この堤の完成により東高梁川と西高梁川の二つの大川となってそれぞれ海に流れていた。東高梁川は、築堤以来度々の土手切れにより大洪水を起こし、流域町村に甚大な被害をもたらしていた。明治39年12月帝国議会で高梁川改修の議が決定、同44年工をを起こし関係3宮・19ヶ町村で東西用水組合を設立、協力と融和の精神で困難な問題を克服し、大正14年4月総工費1019万円を投じて世紀の大工事を完成した。

この結果、関係町村民は、大きな安心と利益を受けることになり、又東高梁川はこの時より廃川地となった。

交通

玉島方面

木屋店(現西の八王寺)を経て蛟水橋(現西の八王寺の八王寺橋西詰め付近にあった)を以って東高梁川を渡り、水江を杉、柳井原渡を経て玉島に至る。

橋梁(廃川後なし)

蛟水(みつち)橋

西の八王寺地内を流れていた東高梁川に架かっていた橋で、八王寺より水江に渡る橋であった。この橋は木橋であったが、明治26年洪水のため流失し以後は仮橋で通っていた。有料で大正末期1回1銭位であったと云う。